Vol.177　映画「おとうと」と絆　（平成22年2月10日）

私は願望として月１回は東京の風に吹かれて酒を飲み、メシを食いたいと思っております。

光陰矢の如き時代の趨勢を垣間見るには、この方法が身近に感じられるからであります。

元来十数年前、業界の関東・全国の会長を６年間させてもらい、神田に本部があって、午前中は暇を持て余したので、上野の各種の美術館で過ごし、時間が余れば都内のデパートで陶芸、絵画展を眺め、婦人服も美術品として見ておりましたので、大丸などではよく店員と間違えられておりました。私の妻の洋服、ブラウスはほとんど私が選んだものでした。

今年のお正月は、陶芸仲間が私と一番良く作風が酷似しているという「川喜多半泥子」（かわきた はんでいし）展を銀座松屋で見させてもらい、午後は浅草公会堂で若手の中村勘太郎、七之助の「奥州安達原」の絢爛豪華な大見得に思わず深い嘆声を洩らしました。

その後の亀次郎、亀鶴の踊り「悪太郎」の掛け合い、念仏踊りの１時間30分、私達は舞台へと釘付けにさせられました。今まで一度も経験したことのないものでありました。芸には上には上があり、限りのないものだと思いひとしきりでありました。

２月に入ってすぐ、山田洋次監督の「おとうと」を見てきました。映画館は普通の作品ですと数名、ヒット作品で10数名が通例ですが、この日は百数十名と思える観客でいっぱいでした。

大型店進出を間近にする小さな商店街で、薬局を営む母子家庭、やがて医師と娘の結婚式に突然現れた母の弟は禁じられた酒に酔い、素朴に喜ぶ様は結婚式をぶち壊してしまいました。娘は離婚して家に帰り、町内の幼馴染の大工さんと再婚する･･･このシーンで山田監督が切実に訴えられておられるのは「家族、夫婦は短くてもいいから言葉で会話しなさい！メールでの会話は止めなさい！」でありました。兄姉達から義絶された弟は、酒と借金と孤独の中で多臓器ガンとなり、施設の死の床の中でさまよっておりました。探し当て、いくつもの憎しみを忘れて見舞った姉に「姉ちゃん寝入ってしまって目を覚ますのを忘れると困るから、テープで手と手をつないでくれよ！姉ちゃんごめんな！おおきに･････」と年老いた姉と弟、テープがつなぐ姉と弟の絆、すぅっと弟の目尻から涙がポツッ！と浮かんで頬を細く流れて行きました。

私も恥ずかしげもなくして、手放しで泣くことにむしろ快感を覚えておりました。

なお、同映画の結婚式は『オークラアカデミアパークホテル』にて撮影されました。

今全国で「無縁死者」３万２千人、自殺未遂者５０万人、一人暮らしの家庭１千８百万世帯、独居老人７百２０万人、まさに家庭が崩壊しています。

この家庭崩壊を救う方法は商店街の再構築だと思っております。「遠い大型店より、近くの商店街の方が頼りになる」と言われるような街にしたいものです。

私の思う商いとは、ハードな品揃え、安売り競争とは土俵を変えて、安心、安全、頼りになる相談相手になる近所のお店であっていただきたいものです。

藤原正彦がハードなものを創出したり、勝つためには情緒、感性を持つことが最も大切です･･･と言います。

感性を作るためにも時には書を読み、趣味を持ち、遊び心をゆとりとする必要もあるのでは･････。